

# 教授に就任して

## 教授就任のご挨拶

口腔生命福祉学講座 口腔保健学分野  
濃野 要



令和3年4月1日より口腔生命福祉学講座口腔保健学分野を担当することになりました濃野要です。出身は新潟県上越市ですが、父の転勤により4歳から新潟市に住むことになりました。

小学校は鏡淵小学校に通い歯学部近くで遊んでいました。まだ路面電車が走っており電車を追いかけてながら白山駅前通りを走ったり、白山公園の池に落ちたりした記憶があります。中学校、高校は上越市に戻りましたが、大学はまた新潟に帰ってきました。それから26年間新潟大学歯学部にお世話になっています。

学部卒業後は大学院生として予防歯科学分野に入局しました。当時はまだ研修医制度もなく卒業後すぐに宮崎秀夫先生のもとで勉強をさせていただきました。宮崎先生が赴任され5年が経った頃で、新潟高齢者調査が始まっておりましたが、予防歯科は「フッ素」のイメージが残っていたように記憶しています。学位研究では佐久間汐子先生の下でそのフッ化物に関わる研究を行いました。う蝕および歯のフッ素症の有病状況とフッ化物摂取量を同一生活地区内かつ利用する水道水フッ化物濃度が異なる地域での調査で、歯科において最も有名な公衆衛生のひとつであるフッ化物応用に係る調査にも関わらず、世界で初の調査でした。このときにご一緒いただいた学内外の先生方と今でも仕事をしていることを考えると、素晴らしい機会をいただいたのだと改めて感謝しています。また、この研究の延長としてイギリスのNewcastle大学に留学をさせていただきました。

私が所属した研究室はイギリス（本人たちはヨーロッパ全体と言っていました）でのフッ化物の応用および栄養学的アプローチを行う中心的チームで、スーパーバイザーである歯科医師のAnne先生と栄養士のVida先生のもとでフッ化物摂取に関する多国間共同プロジェクトに参加いたしました。日本においてはフッ化物応用によるう蝕予防は当たり前で、安全に応用のできる確立された方法であると考えていましたが、他の国では当たり前ではないことも多く、安全が確立されていない中での応用であることに驚きました。また、フッ化物洗口は日本がどの国よりも成果を上げており、その代表として佐久間先生の名前を同室のスタッフ全員（フッ化物応用研究班以外も）が知っていたことに感動した覚えがあります。昨年2020年はそのフッ化物洗口が弥彦地域で開始されてから50年の節目の年であり、幸いにも開始当時にプログラムに参加していた方々を対象とした長期にわたるう蝕予防効果の評価に携わることができました。その成果については後日厚生労働省より発表があると思いますので、覚えておられればご覧ください。

また、宮崎先生のもとでは新潟高齢者調査に参加しました。高齢期における口腔と全身の関連を明らかにすることを目的とした疫学調査です。詳細についてはこの歯学部ニュースでも過去に紹介があるため書くことはしませんが、何より人を対象としたフィールド調査の難しさと楽しさを勉強することができました。宮崎先生は寡黙で気楽に何でも聞けるという方ではありませんでしたが、この調査では研究姿勢や考え方などが（行動や背中で）雄弁に語られ、私にとって公私にわたる転換点となったことは間違いありません。現在も調査を継続しており、今後の目的は社会の喫緊の問題である超高齢社会において健康で自立した超高齢者のための口腔の意義を明らかにしていくことであると考えています。

そして、この超高齢社会のニーズに応えるべく、口腔保健と福祉に関する深い理解を持った人材の育成のために設立された口腔生命福祉学科を担当することとなりました。2004年の設立当初よりこの学科を支えてこられました先生方の活躍はこれまで至る所で目にしておりましたが、実際に数か月と一緒にすると丁寧かつ親身な教育に改めて驚きを覚え、身の引き締まる思いであります。超高齢社会における地域保健・福祉では課題も多岐にわたり、一面的な知識で解決することは難しく、他職種と連携を行うことは必須となります。そこで活躍する人材には問題の本質を見つける力と、広い知識と適材適所の判断を以てそれを解決する統合力が必要であると言います。2つの分野を学ぶ口腔生命福祉学科の学生は複数の分野・知識を統合する素地を備えて卒業していくと期待しております。そして私自身はその人材育成のために、自立超高齢者の口腔に対する研究や新たな地域保健プログラムの開発を軸に、異なる専門を持つ教員の方々と保健・福祉の教育に邁進したいと考えております。

この原稿を書いている令和3年はまだ新型コロナ禍中にあります。講義の中で、WHOの提言するこれからの公衆衛生的問題（2019年）として、ワクチンの忌避や未知の「疾病X」（ヒトでの発症が確認されていない病原体が引き起こす深刻な国際的伝染性疾患）を紹介していましたが、それがこんなにも早く、そして直接自分達の生活に降りかかるとは思ってもおりました。自身に限れば、このパンデミックが、まさに手探りの状態からどのように制圧されていくのかを身をもって体験することで、この上ない教育を受けているものと考えております。学生の皆さんも大変な時を過ごしているかと思いますが、その中でも医療人としての学びを得ていただけると嬉しく思います。

最後になりましたが、長年過ごしてきました新潟の地域保健・福祉への貢献、そして新潟大学ならびに歯学部口腔生命福祉学科・歯学科の発展のため、浅学菲才の身ではありますが、全力で職務を全うする所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。



留学先の指導医、同僚と



シャモニーにて モンブランの頂を目指す像